へ 13
2900
5

へ 13
2900
巻 5

昭和九年七月五日 購求

風俗花情錦の魚 第二編巻之中

東都　松亭金水編次

第六回

東海道の名もうるさい。神奈川とかの宿場。金沢とかの名ばかりなる。繁華のようす。国柄も。物産の多いのも。好む者。美人のようす。好むもの。[illegible]

てふ者りて。活業の助とするもの。門口ふ看商人が看を部して「今日の親ゞすてふ

十枚ばかり並べやせうとのことおもきつけを出す。林の中
あがり き男「先刻も涙の次第が有ろう。月の下一尺寸ほどの
ちいさな蝋ろうそく。生員が鳥紙を重て拭わく 者や「夫でも紙月
お円宝さんが。拭たモシ親がなるほう。義平でもうて来ると言さ
ろうそくを買て来さンざライく 円宝さん親が来やーと
大教だりんが。奥の方へ出て来るか年齢は十六七ばかり。
色黒くして ちり内。容い並ようは低き方まで。やすがとう
美の果えれもうき癖ろうて。乳はまだ弱き活業ばかむ

一ことは常の通り髪が。盆球紬のか袖。天鵞絨の
先帯まで。揚枝をつかうばかり。たりの上まで後を洗ひ
廊の板の間を。紅毛でもや見の時廊の源まで出て来るん。
毛金海屋の如き お秀とよば老婆ろう 第一でも絡く
しの物板ーンざる 金「此りやくくの親を
者さんば入れろうの ろう 板ろうホンニ今 板
ろう 板ろうば。十二 角の。ちらと 親
朝の二十枚や三十枚あり ろうとも。関ろう ろうの

でも十文板でも紙ナ　「アイ史さ〜十文板ぢう買ひたい
みせニモンおくさんはどうぞ　「どろたさんがえんかん。何
仕なすつさうえ　「空酒業用で荷土の方（きつやも紙日
ありさうなものぢ　「今どうもでご。彼人のまさ来さんざ。
買ひきつて買子。私ぢが仲るでの物率彼人ぢ。その旦那
おるつさ〜宜らうと云て居やす〜　「旦那来ァあり
うらうぢ。角ひぢ寄うお光婆ぢやァ来ざらう　「彼
まり九板でもますすり。内紙ぢやァ頼う。旦那ぢ来て居と

ぢ浮利ざ〜〜　「番ぢ。彼ぢ手板ぢ三ぢ好ぢ　「ア〜。
パイぢ〜ぢ〜ト着を撫ひ。弘ぢ手門は戸引ちぢて。早ぢむ
種をおあると。男ひの他ぢ他ぢ。どろたぢ。彼ぢう遠入ッて汗ぢ拭ひ
て漸く遠ぢぢ。ぢ彼一丁屋一里ぢ。そ三ぢ者の人ぢ
ぢ。橋丈さんぢ彼ぢ彼ぢ。遠ぢ遠ぢ彼ぢ
者ぢ彼ぢ。ぢ〜遠入ぢ。ぢ〜大分ぢ
入さ。今ぢ今ぢてぢ彼ぢ者ぢ　「九板ぢ
いまー〜ぢう。私ぢ大きぢ板ぢ拭ぢ。彼板ぢ酒文ぢう

夫婦げんかをする和ごうぐ。そもそもの酒
屋桃ふ。物語合ゞ出来やうさ
イ稽くめつけやうさ　「そうう夫ア和ア盲うつさ。ドレは後ゞ
夫う　「お板サトゆるゞ。後の酒を引あけとゞ。婚夫ハ系
屋を出す。姑ア今さ〳〵殺然ふ。後を当て後ゞの
お秀ハ。嬉ゞ者ふその年ハ。脊恰好ふ。物和
そ二ツのを分ゞ。この板ハ。系法会の紳士の。後
ど四ちのとる和う〳〵ゞ。その人ハ。ふも夫う。物和中〳〵物

娘ふ如呪ふ。ゞお秀ハ満面ふ後を含ゞ。「この後ゞ
結如呪ゞ。そ〳〵大ゞさえの出泡文色うふ。そ
ゞア大丈夫　「お板ゞ。イヤ出若ゞく。サア結婚ゞ方ゞ。
お秀後ハ好ふ。ふのゞ。さゞ娘屋ゞふ。
〳〵そうち歌び娘ゞを立ふ。ゞ中のふの夫伴の系ゞ
自分ふ茶を汲ゞ出ゞ　「お茶ゞ後ふ。ゞ
〳〵流茶ふ年ハ何家ゞ。ゞ十七。夫ふ。
イヤト心ハ知ゞ。ゞ

まうせい。男ひもうゝ公兼親ゲ家柱の給方う。浦戸のお
夢と安てまの云と安ひ。云ゐあの流海金うの記と原のきけ
繁〳〵ありとのみ。ゐまど金ゐ絵ふ保子多へ。ゐ人て撰ぶ
べきゐもあゝびと。ゐよ方ふ使ゐ。ゐ方と。て（ゐゝ）ゐをりへ。
お秀の安てうち咲ひ。ま〳〵そをゝゲ浦戸のお要の積ゲ
ゐ達ゐ。ゐう〜安ゐ法度ようゐ方の大ゐゲ。銭千百ち知
ゐやアゐうゐ。ゐ金でゐをあゐ（人）のゐ千人ゐ安酒造ゐゐ
ゐう〜。お銭ゐのゐうゐうゐ安のゐ方。且ゐゐ未ゐ人ゐ

ゐやアゐ様ゐうゲ記ゐうゲ拂ゐ比分。大ゐ婦女の二人ゐきれゐ
ゐゐゐうゐう〜。ゐゐ〜ゐゐ世（人）大撰ゐ所（ゐ）ゐゐうやア
拂撰ゲョ「ホンニ」ゐ板でゐのますゐ浦戸ゐ人ゐれ
百ゐでゐますけゐど。侍ゐの交ゐもゐゐ。ゐやゐゐ
ゐまり撰りすぎて。却て窮屈でゐますゐョ「ゐやア
ゐゐゐんゐゐう。ゐて他のゐ出ゐと遠ゐてゐ要ゐゐと
他ゲ娘ん。ゐ板ゐの彩ゐのゐと。大低ゐうゐ人ゐちゐやアゐいのサ
「アノ発ゐかゐゐ。ゐゐ板ゐうゐ様ゐ。ゐゐ〜ゐすゐ。百板ゐ

お秀

みどり

お世話まうします。「ナニサそふやア按摩さんな。私も平生稼く四郎ふる旦那の子。最世話のかを有のようで。おあがりなさいヤレコレとさまでべ私どの倒く結ろう。学ぶ者の者ア去るのショで旦那のお宅ごが。十六七歳のまるを新いと私作ろう。そ処で桂土三男まで来て移み出さ。その実ふ。まず男を初ーざっと。私ども不肖尾ろう。源さるいで云ョト同ろけ。出てやあ。歌ろと許る私の汚を今さふ洗ふ。なくなかとそう思ふ

のこまるお爺が帰りふ。定めて喜び見るべー。夫が厨のお見舞ご。ぞふ。その実をこの為ふ。て此処より来ふ迎えと男を。新ふかく暁せーるもあり。で最初の代云ろ。まの手まで帰ひて。すぐその内の乾ろふ。ようと男ふ塗さべ。渠ろ。ハ濱さのこ泥ぐ。ぞまこの止ねべきぞ。ぞ眼をどの者ろ。復活せんすんが。ぞ未ろ。ぐどふ。ふ者べその者ふ。義千ふ。べと。ふ納めて業未べ。「実ふ。ぞ私ろ。

ひさしぶりでございますわん　「ハイ　私ども　あのあの
ほうばかりでは　ひとりぐらし　なにもうくつてあの
十七ものあの望の家で　ばかりをしてさるものが　あいそう　私の
嬶が　紙のごとくにうすくお　あの十分の　ひとり　彰へ出て。
さるくの　泡を　吹　源　切ごーの　追　焼　彰　打つ　ゆ
ぶ　ぶんが　拍　紙　「ハイ　お　ぶ　出　来　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ひーませうう　「十二　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

りぢ。私もえんぞも一向ひとえんぐ。毎日内証さえのお仕事だ。人の
どうも仕すぎと聞く〳〵あぶけさえんぞ。ふたりが仕事
えんぐ。ハて〳〵彼方が何様ごろの様子。人今
め丈ぶ。ハ繁さん。私が性〳〵仕事せう。酒を拵へいで。
まことんざるを仕事め。何様もその方へうけちゃ。すぐ
仕事〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵祝やるお寿が眼元が情を食ー
その景物が繁地丈と寿心の程が見て。十二
そやあ丈〳〵ぐ。私の方で。何様仕事でお長さと

ちゃ。ことのよまする〳〵。イヤ様へ祝へ祝れ。ヨ。十七八の居振
を。答のいる麻ゲあるのるる。まこと乃で新ふお毒味を寿ハ
ものこと。ハて〳〵お様井ア。ものさまえん丈ごとこの仕方も様
ぢどの好男子ごけもど。ナニサ実の例ご男振へ至と長寿
寿ものの。ふう〳〵何で強い〳〵。ハて〳〵
大不肖尾ごは方でだろうとするのごろ〳〵
老波ヅ塗ヅ波もうるさ死お〳〵ふの家へ出入の傳
寿。莞乎ら〳〵て揚を屋め。ハ酒宴ゥ様ごろ。すゆ〳〵

秀「ヲヤ東寺さん。何の用だへ　東「チト内證でおまへーサ　秀「夫なら
こゝへ來て坐り。跡で此人の荒木と　東「アノ噂の疑ひ深へ聞てよ。
先刻も何かおまへの噂で居る様子でございますが。おまへさまの一方一
にも成りて實はあれきり家元を攪ず。東「おまへもきつと頂戴
滅多な性悪でござりますが。彼様な美人の内室さんと何して居らるゝ。私の
事がなら何も知らぬ者の身を卿にして鐵炮のござる。私きや邊
くつてあるので。何もかもみて仕舞ふとおつしやれども。と
うの万事世話になる者でござると思ふて居て居るゆゑ覚つてア

丈「イヤモウあの様な迷惑千万。
おまへを待つも寄るのうち此様なお咄し。東
あまさが内室さんと何様　東「心に案ておりますまいかと
する顔色するも二人の風情をすまして。後は内へぞ悲しさぞ。
路の野とうさ山路の道標に誘ふる嫉み己夢より長く伸し
言ふ。是悪く篝まで泪にまろせ逢ひて思ひ侍り。さよなら
あるべく引攫ひ心浩の花とせんもの心に汁被居けり

第七回

美人天上より降る。能塞旅で春あるべしと待ちまへのけん

藝華とのゝどうのちはい。固徳の沢渉みて。四倉まつまの
世の郷里うまれ。殆華ゲかく窮窟なる。且家竹の洞ふさ人情
きとる美女を紹ふ。ゲゞふあゝ〜ざまで。色好こう酒宮第ふ。美ゲ
ふを沒伝え。ゆゑ先を訪ねることこと。この金沢角人まりつ。
故如実ふ低沈て殆華を見んとあり。ども。殆華ハ色て大きこう。
知へらきとる處おゝて。ぴぬ百あの金ふ。多ふ清取て
立ふ。うまべ。お美ハ。ことを大切ゝて。ともむ。美なまど。
敢てことゲ。ゆ美〜出さべ。絶ひて。見ふ。ゆ人も。

われかことを先ふて。ゆるもあまこど。九そ人情のあるもの。
人の心とハども。美ハ一ツうのみそ。者せどとすまべ。
者食うゲ世態素海りしても。拒懲ずきふ。皇を遇ふ
人の美なまべ。お美ハ。国ら海つきて。驚ふのゝ。色と
ふの殆華ゲ窮窟なる。美と。のゝく大ふ。ふ。
ゆるを。ふ。ふ。迫〜〜くとて。歩て大金をきふ。
立絶の知うまど。その絶ふを。洋ふ。ふ。
考とふ。ふ。ゆ。強金ふ。絶うどのひて。立ふ。ゆ〜れば。

知らせべきやうもなく。月卿雲客は後ど者後者。北月後ろ
けるべかを者い熟ありのやうかの大そぶ者後ろ客ふ
測のことどもをするふ大病発ものくハ見近ふ
の黄金をきびしるべ。支配人う魂彩より嘉く見樂
らるとそふの自在ふ〜ぬうべー。文を暁らずーとそ切ふ。
羽翠を人ふ見ぬもせど。縉紳の嫉妬毒う。長光寺のかるふ等
〜く。秘伝ふすうの白痴律儀渠を者んとそそ指めハ。
ふ客の多ろ〜ふ一切一月も者せさるべ。墨ハ後ろど者ふ

く多ろ客さ人見の書くろうつ。知ろ後ハ後業の妨ろうとろう
羽翠を粉〜〜。多ろの紙紡をまべー。思ひふるとべ
ろのとを。ぼふふふ商強するふ。ぼふふハ明多ふ。羽翠ろと者
長ろと中〜移ど。お多ろ嘉〜く嘉を〜。物をろふ物〜。
思ひ多ろ〜打多ふ。ろの商強のありけるハ強後ろとど後
契ふ仕ろ多〜の人ふ肌作すせんハ。色のまと始まー〜。新や
せん角やと流吟〜〜。中多の奥を後ろまでハ若〜〜移ど
大ろ〜も多〜の金をふ長ふ。ふ行けてろろ〜紙様もあれば。

ことく女房やう子ども音信ずつれ心懸う。如幸を並の拍子。
うきうかう〳〵ぬけらひうぞ。さるべき時の順女の法師
業平を勉めさせて。流り目のぬるかるやあんぐさ。若そう
よあて事年も。その俗もあるをの沙汰ふすることも
難うぐと。羽を拡ふ。ふるかその儀ふ泥ひと。羽幸
まひ言うせ。ぬそ順女ふすけうぐ。ものあ〳〵ふう。
愛八間未拡ふ部え羽やきく物るも。如ふ新の付貴
下戸もとあ〳〵さ及長釈教年とのあふ若とも。俗ぐ

えんと稼〳〵のまも。仲〳〵あるぬ把ふ。怨ふ浮利うく
うて。金沢屋へ来る客のこうんぐ。ふ
俗して俗ふ来ぐ。始めふ秀もこぐ新のあうう。俗へふ出
さぐと四ひう〳〵。金の把ろぐ面ふくて俗ふ来る毎ふ出
きぐ。ぬふ沙ふ欲びて。稼て
この俗うと。羽幸ぐ俗ふ〳〵俗ぐ
紙ようきふ〳〵ありて。扨ぬえ金せきあぐ文ぐ。
ありぐ。おあふ宅の白家さんと。吏稼日拡ふ

ゝぬのもうの。指めゝくてれれと。初ゝべくての一回の祝ひ
をべ。汚さまいのヲ編されと。一家の寿ゝを今さゝ後悔
さへあるを連て逃るの。一例の家いとの長ぎを耳かおすせん。
脇まり重衣ひのさるゝ。編されと薄ごその沢城内室
さんの長岩やうと。いそまとさん祖さへ。ぎの情もゝ屋の
女児ぎ。片寝法ゝ怒まると天窓捨ゝ。ゝ明ゝあてんても
忘らまど。おもゝべと見ひり。急かくするちまる。そて
新ゝあゝゝ。のとゝ。ちゝ初春ゝ。物方の黒も張へゆ。殊

さゝゝ。ゝ新び例へ。昭日のゝゝ。役日初見へ。ゝけと
ども。ゝくゝ。の宝めゝて。仕新のれとうけまくも。ゝ長
ゝ。ゝ。ゝも若ゝ若松ゝ。ゝ方ゝの海ゝ。竟居で
けのゝゝ。ゝ。ゝ。奥女都閑もゝ。ゝ連。衆色ゝ。ゝ。
殊ゝ祝卒ゝ。ゝ。ゝ。ゝの間もゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

満金ふくで一人のあやーと拵の逸見の殿ご新（月ものがたり）
歌で形ちふ迎入とりふ新白ごうどう ご
文さえごま好れ人後ふ怕らーさせーョ 文「人ご遠ゆそ怕らーも
百ごふ御も新ふ仙合れ人情知ーずごの 「伊達 文「ものも
れ人のんごは方ごまふ面ふるつてい人ごそ方ぢゃア九で参ふ
て。先の辻番て安ませーとりふ風ふ」と居ーまるうーー。ア
決まーれ人お月さる人孫ふ寺ーで居ろれ人地屋ごうーー。ア
見ひ切らうとるつても叔ごうごふで家ご月ゆふうーご。おふの

新ふ入ると頭怪ご起て。ごーきを勧めるごゃア れ人。金ふ入
なくまーー。初ごえふ東埼玉ご秋帝でも生い不後とうち
親ごろ。思つて呉ても百ごゃア れ人ごとの と鉄砲ふくご実の
ョ 「お前ふ乱れらそまると。私ごゃア極と板板ーて百
らうーと実ふ前ご撫るふ子 文「そりゃア ごいいうーとうー
ー。挨拶ふ関るとふのごらうーうごゃ。とうーー。関る強も
あるめ人。山ごもお前ふ学ー。角已も後ーーの新聞で
も れ人世ふある洲ふ明人ごゃとあ人。ア伊達と長ーとうーす

文藤

放蕩をしかねる者。殺るの者の親類もいやア親の恥
まるとの。の親のるを見つてとく（来て居るうちか。あの
あたとまてあとべいつ別親しと長板の金比羅さん
が抱きつて。行くと名をのんざ。お前の何板しとうか
うと。隠くれ家べ隠れへこけで。きづあを作と四ちとの
てい実ふの毒でア青のあ〳〵何板とうと。真ふ
深後へ壊う〳〵。出てもあを救ひあげて。きつてへのごと
思つても。今の身のとおアゆるもの。金比羅さんも何板

あるンざアノ後ふ無きとおあ。板りふあるとゆう。と
百あやに百あい。ときふ出てきるとづざと。実ふ不測あり
ざけで。何板の分解ゴロ〳〵ねへう。私のあとを知て。
けるお前ふ出てこれ〳〵。板りの板で金比羅さんの紀張い
妹ふ壊つてきり。とへ後とまきるのと。板りてとりやア
友達の。女房を盗むとふ係でもの。実へ私も悪う。お
あふ抱て居さけとど。友達の義ばづくを。おのりく居りと
場とて居ざ。板りまつりやアその後〳〵の身ざ一四かとて出て。

矢も抽もなく〳〵ぶく喜ぶお爺
の喜びざまで給方ゲ有へ活恵し
ゐ〳〵ばを泡ふ爺ざとをて爺ふ。地のを教ーぢゃアれく嬉ごト
爺心ゐんゐる文徳ゲ云爺ふ爺ゐふあ〳〵ねる。踊すわどれ
ふの爺へ。頼ふあ〳〵ふる慎ま。備もお爺ゲ知るゐ〳〵ば。でい
爺ーとをまこのを。業ーて踊る。ねを自ら様ー
めど。文徳ゲ様もまさ〳〵ふ。仇あゐ〳〵ね赤ゐゆふいをんい
ゐ清ま。芸糸と笑を食

一実ふる。お爺を喜ふの

ゆアゐゐゲ爺。爺ふ祝ちゆア。爺ふ若爺ゐるゲあるゐ〳〵サ「文」「す」
ゐゐふ金沢屋の源家ゲ。ゲゐ〳〵ゲゐ貧ゐまふの老爺ゲ
ゐ〳〵。知ゐゐ〳〵ゐゐ貧ふゲる爺ゲゐゐゐゐふの文「アイサ。」
爺ゐ爺ゐ私の爺へ物様ゐゐ〳〵ゐ様ゆアー爺ゐゲ。教様爺ゐと
お爺ゐも物様ゐゐゐゐ爺ゐ爺ゐ爺ゐ爺ゐ爺ゐ爺ゐ爺ゐ爺ゐ文「自己アまゐお爺ゐ文
爺ゐ。物様ゐれても教ゐゐても宜ふ。ゐ人ゐ一せゐ一回ゐゐアゐ
教ゐれ人自己の様ゐゐふの爺ふ。教ゐゐゐゆアゐゐゲ。爺ゐ爺ゐ
教様ゆアゐゐ爺へけゐゐ「ア」ゐまゐを様ゐ癖をゐゐゲ。

私どもそこ程の美婦かしそる顔をしてまた美人知しるの
事をするけとどアノ所おとりの仮ダ流ふうるさいこの者く
すると嗅つけらるるざらうと思ひますの「そこ程の他れう
怖ろしい。せ物ダ食るものこの者ハ」「アレサ誠ぢやアないヨ。
あるがそこ程ふかしびざらう。ようやあ高ゆの者の。私憎ドやア
あるまいなとど。他の男女樣と違ツて私の名あやア。程く
ものこの分解ざあるこの。そこ程ふ一寸ドやア
海ふのこと知らこの者サ「ハテサ童子ふ。さうあ私ざう流浪

ごう大概知さうなものこの。歌舞伎ふ「もこの者ごつき
ませうざ「ドンなふ人のお伺りを「ヨヤまア長ざ雅ふ
おなざエ「ヘン蛇の長ふ蛇ダ知るのサ。まアそやそ程ア
踊ふ舞を踊ぜ「ハ〳〵〳〵他ざ〳〵ドン踊ざアる
まいう「マア行ねへナとこふ居るこふ雅も長ざつこみもあ行く
「アサ文ぢる知ざ長と「エ中世ますの肩ざのう
天井で「チリ〳〵〳〵

錦の魚箱巻二編巻之中終